

曹洞俳壇

選・坊城 俊樹

古井戸に声の訝こたまの夏蛙

兵庫県 内藤 昭子

評 夏の蛙となると、春のものよりも活発な鳴き声となる。

古井戸で鳴く蛙の声は殷々と響くのである。それを「訝」ととらえたところに、山深い寺などの景が見えてくる。これは作者の美意識のなす措辞そしであるといえる。

春水に映りし髪かみの乱れかな

静岡県 後藤 久子

評 髪の乱れはふとした風の悪戯だったのか。女性らしい優美な感性で彩られた句。春の水であるからこそその艶やかさが窺える。昭和の女性俳壇で一世を風靡した杉田久女の句を思ひ起こした。

◆ 朧夜おぼろよの花街を抜けし禅寺かな 大阪府 数藤 茂

◆ 菩提寺のどしり坐禅の鏡餅 三重県 西村 廣視

◆ ひとまはりふつくらとして山笑ふ 広島県 鷺見 葦月

◆ 春星や昔の家族どのあたり 島根県 今岡 式枝

◆ 新緑がまな板に来て母忌日 北海道 杉山 桂子

◆ 中空に横一列や鯉幟 神奈川県 堀田 耕一

◆ 鶯の擧経こきょうのもとの野辺送り 静岡県 末光 愛正

◆ おが男鹿の海知り尽したる鮑蟹あわび 秋田県 小田 篤恭葉

◆ 粽もち紐なまなぞなぞ遊び解くやうに 和歌山県 田崎よし子

◆ おみくじの大吉うれし四月馬鹿 山口県 御江 恭子

* 選者吟

凌雲閣崩れしあたり鳥雲に

俊 樹

* 作句小見

「凌雲閣」は明治・大正期に浅草にあった十二階建ての建物。関東大震災で倒壊したという。今ではその名残はむろんなく、ただ渡り鳥たちがその崩れたあたりの虚空をふるさとに帰っていく様を詠った。

曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

いくつもの迷いは川面にのせてやる渡りゆく風寄り添うだろう
秋田県 小松 紀子

評 迷いを払おうとしている作者だが、その迷いに愛着もあるのだろう。風がやさしく寄り添うことを期待しているのだから。迷うということの本質がさり気ない表現に籠められているようで心惹かれた作品。

まどまらぬ歌は手帳の片隅に時をまちをり
花まつごとし
愛知県 田中 澤子

評 手帳の片隅に開花を待っていた歌のつぼみ。その時は、まどまらなくても、時を置くとふっと出来上がることもある。歌の理屈ではない妙を言い当てている。

◆ 灯台もローカル線も消えゆくを吾の晩年と重ねていたり
東京都 鈴木 正作
◆ 空家にも椿は真紅に咲きおきて請負いのみの家の解体
秋田県 金子 幸子

◆ いずこにか漂いおらむ子を求め男は潜る七年目の海に

宮城県 小田島麻利

◆ ひらがなのマジック文字に金魚墓子は線香と灯をあけて

新潟県 星野 三興

◆ 雛に餌を運ぶツバメの行き来する古家の土間に爽やかな

山口県 濱田 道子

◆ お互いに素知らぬふりで三尺の間合いを保ち蜥蜴と見合

静岡県 高尾 善五

◆ 菩提寺の山門に入れば花御堂の甘茶の香りは昔のかおり

愛知県 深谷ハネ子

◆ はや三年友の忌修する法堂に雨のしぶけば声かと思

大阪府 高畑 良圓

◆ 吾が一畳に一夜のいのち今し終う緋牡丹一輪の幽かなる

兵庫県 前田あつ子

◆ 出来上りは三時と記す店先にパン焼く匂ひ漂ひて来ぬ

東京都 長谷川 瞳

* 選者詠

母の日の手鏡映す白き薔薇背中より来る時
の波動が
ちづ

* 作歌小見

数詞を詠み込むことで一首が引き締まることがある。小田島さんの現実の重みには肅然とする一方、前田さんはリズムを、高尾さんの歌はユーモアを生んでいる。高畑さんは導入部として効果的。それぞれ工夫されているのが分かる。



大本山永平寺



まごころのともしび

霊峰白山の麓を流れます九頭竜川の河川敷では、本年も「永平寺大燈籠流し」が営まれます。残暑の夕べの中で、沢山の供養の燈籠や、子どもたちが絵を描いた願いの燈籠が、静かな水面を照らします。想いを乗せた数々の燈籠は、大きな光の川のようになり、言葉にできない有難い光景です。静かに手を合わせ、すべての生きとし生けるものが安らかならんことを願うものであります。

さて、燈籠はその明かりで暗がりを照らしますが、どんなに綺麗な燈籠でも、その内に明かりが灯らないと全く見えません。燈籠であれば何の問題ありませんが、私自身であればどうでしょう。修行僧が、修行しなければ名前だけの修行僧になってしまうように、たとえば和尚（私）が、仏の生きる灯（仏戒）を保たなければ、格好だけの和尚になってしまいます。心にも実にも、わが身に仏のともしびを灯したいものであります。ですから私は、一日の終わりに、今日一日、どれだけ和尚の言葉を話し、眼差しを傾けただろうかと自らを振り返るのです。

永平寺では、夕べのおつとめの最後に、お釈迦さまやお祖師さま方と等しく道を歩み続けたいと誓い願う「四弘誓願文」をお唱えいたします。

日々自らの、ともしびを温め、わが身を振り返り、皆と共に安らかにありたいと願うものであります。

「四弘誓願文」

衆生無辺誓願度。煩惱無尽誓願断。法門无量誓願学。仏道無上誓願成。
（人に親切で、よくばることがなく、いつも謙虚なほとけの心を忘れません）



大本山總持寺



真夏の總持寺

旧盆に当たる八月は、修行僧の多くが師寮寺（師匠のお寺）手伝いのため、数日間の他出（帰省）をします。

特に今春上山の修行僧にとっては初めての他出となり、たくましく成長した姿を御師匠さまや御寺族・檀信徒の方々に見ていたく好い機会でもあります。

ところで夏はよく草が生え、お寺に住む者にとって悩ましい季節です。總持寺では除草剤を用いず、ひたすら草むしりに精を出します。草むしりのみならず、広大な境内を清浄に保つための掃き掃除や雑巾がけなどは、大切な修行の一つです。

また、境内各所にたたくむ沢山の草花への水遣りも夏季の大切な任務（さむ）です。特に、本年は六月下旬に修行僧全員でさまざまな種類の紫陽花を剪定し、約一千本の枝を挿し木しました。そのため朝の水遣りはなかなか大変です。

この挿し木を放光堂の前庭でじっくり育て、来春には境内の各所へ移植します。近い将来、總持寺が「お花の寺」「アジサイ寺」となって訪れる皆さまに楽しんでいただけたら幸いです。

その他、八月は参禅者対象の「夏期参禅会」や修行僧による「祖（そ）跡巡拝（せきじゆへい）」（總持寺祖院や永光寺への研修参拝）が行われます。